

文革内幕物の白眉

●中嶋嶺雄

『月刊文庫』9月号2018年

本書は、昨年、アメリカの読書界で大好評を博したものである。原著の表題 *Life and Death in Shanghai* が示すように、文化大革命の渦中における生と死のギリギリの狭間で展開された一人の中国知識人女性の抵抗の記録であり、文革と毛沢東中国のおぞましさを克明に描いた告発書でもある。近年、文革の悲劇やその恐るべき内幕をテーマにした著作は数多いが、本書はその白眉だとも言えよう。

著者・鄭念女史の夫は、元国民党政府の外交官で解放後も上海に残り、シェル石油上海支店の総支配人であった。一九五七年の夫の死後も著者は経営顧問として仕事を引き継ぎ、愛娘の梅平も若手女優として活躍しはじめると、中国でも例外的に恵まれた生活を送っていた。そこに起ったのが一九六六年夏以来の文化大革命である。著者は、当時の熱狂的な排外主義と反ブルジョア的な風潮のなかで、外国に内通したスパイとして攻撃対象になり、紅衛兵に家中を荒される。

とのない娘のキルティングを手にして不安に取り憑かれた著者の予感どおり、娘は文革中に「自殺」していたことを出獄して知った。悲しみのなかで著者はその自殺が本当であったのかを究明するのだが、北京政変で「四人組」が逮捕されたのちの一九七八年十一月、ようやく著者の名誉回復と文革期の殺害であったという娘の死の真相が公表されたのであった。

このように苛酷な生と死の舞台の上海を著者は一九八〇年九月に去り、香港経由、アメリカへ「亡命」する。「そのあとデッキに出て、この世の見おさめに上海を眺めてみた。……やがて船は揚子江の河口にたどり着くと、それまでの嵐はどこへやら、雲の合間に幾条かの陽光がさんざめく」という情景を、終りにいたって読みすすむときは、まこと感動的である。著者は現在七十三歳、旧知のティルマン・ダーデン夫妻（ティルマン・ダーデンは元「ニューヨーク・タイムズ」特派員で、アメリカきっての中国通）らの励ましでワシントン郊外に住んでいるが、遠く祖国の安定と近代化を願っている愛国者でもある。

本書は、このような著者の生々しい体験を通じての文革ドラマの書であるが、もう一つの大きな特徴は、そのクロノロジカルな記述によって文革の開幕から陳伯達の失脚、林彪事件、ニクソン訪中、周恩来や鄧小平の浮沈

『上海の長い夜』(上下)

鄭念著
篠原成子・吉本晋一郎訳

〔原書刊・各一〇〇〇円〕



自宅軟禁、闘争会への連行ののち、ついに上海の第一看守所の独房に拘禁され、以後、一九七六年に病気を理由に釈放されるまでの六年半、不当な取調べと自白の強要、迫害、拷問が続く。だが著者は決して屈しなかった。執拗に身の潔白を訴え、抵抗と闘争の日々を続け、謝罪と復権を求めて耐えぬいたのであるが、それは娘との再会への希望に支えられてのものであった。しかし、寒さに耐えきれず差し入れを求めたとき、ほとんど着たあ

天安門事件、毛の死と後継者争い、北京政変などの中国の政治過程が、獄中での看守の態度の変化や著者が読むことを許された新聞の読み込みなどで確認できることである。この点でも貴重な書だといえよう。

最後に本書の翻訳について。訳者が英語に堪能なことはわかるが、文革というつい先日同時代史の重要な出来事を邦訳するのに、訳者の知識はあまりにも不十分である。しかも、一部を除いて「毛語録」や文革関係の書に目を通した痕跡もほとんどない。「主席」が「首席」、「委員長」が「文革新組」が「特別委員会」、「労農兵」が「労農戦士」、「統一戦線」が「統一前線」、「経験交流」が「経験交換」などの不適訳はまだ許容できるにしても、「世を風靡した毛沢東讚歌」「東方紅」が「東天紅」となり、上海を舞台のドラマだというのに「黄浦江」が「黄甫江」であったり、今日の中国の重要政策「四つの現代化」の中味もきちんと訳せないのでは、あまりにもひどすぎる。刊どころどころにはめこんである中国語も誤りが多い。刊行を急いだためであろうが、出版社の責任も厳しく問われねばなるまい。

(なかじま みねお・東京外国語大学教授)

